

描画法を活かした子どもの造形表現活動の内容

— キミ子方式を用いた保育現場A認定こども園の実践から —

岡本直行¹⁾*

1) 新見公立大学健康保育学科

(2022年9月21日受付、11月16日受理)

本稿は、描画法の出版物、描画法に関する文献、キミ子方式を用いた造形表現活動を実践する、A認定こども園、B幼稚園の活動記録の資料から、キミ子方式の実践内容や方法とそれを活かした子どもの造形表現活動の内容や子ども絵の影響について考察したものである。

結果、キミ子方式等の描画法を子どもの表現活動に生かすことは、画一的な作品や個性のない作品を生む、また、写実中心主義となる可能性があるものの、子どもの実態に沿うように工夫した内容の活かし方、言葉がけ等の指導法によって、個々で決めて自分の色や形で描画するといった、作品に自由を与えることも可能であること、子どもの感動や発見、満足感等を与える活動となることも分かった。

このように、キミ子方式のよさを子どもの実情に合わせてアレンジされた指導法によって、子どもの心に寄り添い満足感を与える絵画活動の実践が可能となる。

(キーワード) 描画法、キミ子方式、造形表現、保育現場

1. 研究の目的と方法

1) 目的と方法

本稿の目的は、キミ子方式を用いた子どもの造形表現活動の指導内容について、保育現場での実践を通して考察することである。描画法や子どもの描画活動に結びつく実践的な書籍は多く出版されてきたが、保育現場における実践を基にした内容や指導法については、造形教育の研究対象としてはほとんど見られない。そこで、本研究では、キミ子方式の出版物、キミ子方式に関する文献、キミ子方式を用いた造形表現活動を実践する、A認定こども園(以降、A園)、B幼稚園(以降、B園)の活動記録の資料を用いる。それらの記述を確認し、キミ子方式の実践内容や方法とそれを活かした子どもの造形表現活動の内容や子ども絵の影響について考察する。

2) 倫理的配慮

今回取り上げるA園、B園の活動記録等については、各園から本研究に使用することをご理解いただき、ご提供いただいたものである。

2. 戦後の子どもの造形表現活動の流れ

子どもの造形表現活動において、指導に当たる保育者は美術を専門に学んだ者だけではなく、美術に苦手意識を持つ者、造形表現活動の指導や援助、子どもの絵の評価に戸

惑う者も存在する。そのため、子どもの興味や関心、感動等、を形に表出したいという子どもの心に寄り添い、適切な指導を行うことが困難なのが実情である。学校現場で図画工作を担当する教師の苦手意識に関する質問紙調査(2011降籟)によると、67.8%の教師が図画工作の教科や指導に苦手意識を持っていることがわかっている¹⁾。また、苦手意識を持つ理由として、教師自身が絵を上手く描けない、指導法が分からない等が挙げられており、教師が苦手意識を持ったまま指導していることを報告している²⁾。

その背景にあるのは、1970年代に起こった、教育の現代化運動の学力の保障という課題にあると考えられる。教育の科学化が進むにつれて、戦後の日本の教育を支えた、自己の表現によって完成と理念の統合を図り人間性を形成するという、ハーバート・リードの近代思想に影響を受け実践された自由教育の理念が衰退していった。それに伴い、本能的な創造性の表出や育成を重視した美術教育観、学力観も後退し、造形表現の指導が法則化されていく。学力の保障が求められる中、造形表現に関わる科目の内容や指導では、クラスの子ども全員に絵を描かせる、作品を作らせるといった教育観を生み出すことが目標となり、作品展への出品や学内での掲示といった方法によって、落ちこぼれがなく、均質な作品、誰からも上手いと評価される作品制作の指導が求められるようになる。また、各地で酒井式描画法やキミ子方式に代表される、描画法の講習会や研修会が開催された。

*連絡先: 岡本直行 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

その結果、描画法等の造形表現のマニュアルを導入した指導が流行し、全国各地から出品された子どもの作品が画一的な作品である、形式的な作品であるといった課題を生むこととなった。内容や質は充実している半面、子どもの感動や心が表出されていない作品群は、造形指導のマニュアル化や同じパターンの作品が溢れる等が問題視された。これは、指導者側の視点に立った作品主義の指導の現れといえ、子どもが絵を描く理由や子どもらしい心を重視する造形表現活動の見直しが求められるようになった。結果主義、作品主義の反省から1980年代には、造形遊びと称される遊びを中心とした表現感が生まれる。それは、子どもが絵を描くのはなぜか、という表現の原点に立ち戻る動きであり、子どもの自然な表現感、子どもの造形教育の基礎として定着している。現在では、造形遊びや子ども本来の表現に立った作品作り、色や形の読み取りを重視するリテラシーの視点を重視した活動等、が展開されている。

このような流れを見ると、キミ子方式を活かした指導が子どもの個性をなくしているかのようである。幼児や児童のメソッドによる描画指導法を研究している島田によれば、幼稚園教育要領には、「上手に絵を描くことをねらいや目標としていないこと」「思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度には結びつきにくいこと」等の問題点を指摘している³⁾。一方、キミ子方式の研究を継続的に行っている松本昭彦は、大学生の授業にキミ子方式を用いた実践を通して、同じモデルを用いた学生の作品には、それぞれ個性が見られ自由を感じ取ることができるとしている⁴⁾。また、一般的な絵は、個性や創造性が重視され、観察を通して描くという描画の原点が失われつつあること、キミ子方式は写実が中心であるが自分の意志で決めて描くという点で自由であること等を述べている。

3. 3原色を用いた自分の色づくりの重要性

キミコ方式は、1970年代に松本キミ子が考案した描画指導法である。小中学校の代替教員時代に、絵の描けない子どもと接したこと、自分が行った授業がうまくいかなかったこと等から、試行錯誤を繰り返し考案された。キミ子方式の目標は、①すべての子どもに、絵を描くことの楽しさと能力と自信を身につけさせる、②個々の教師が特別な才能や技量を持たなくても、一定の水準の適切な指導ができる、ことであるとされる。

キミコ方式の色作りでは、使用する絵の具の色を、赤・黄・青・白の4色に限定している。それは、混色によって新しい色が生まれること、色の美しさに気づくこと、色の分量の違いでトーンに差が出ることを子どもが知るためである。キミコ方式公式HPであるキミコ・プラン・ドウには、限定された4色さえあれば「宇宙の色がぜんぶつくれる」とあり、混色により生み出した「自分の色」が重要で

あること、市販されている36色や72色の絵の具の色よりも自分の色のほうが自然界の様々な物の色に近いこと等を挙げている。

色作りの活動は、まず、赤・黄・青・白の4色の小さな色の玉を画用紙の上部に描き、次に、4色のうち2色の混色で生まれた色の玉、3色の混色で生まれた色の玉、4色を混色で生まれた色の玉を画用紙に乗せるという流れで進む。この活動の留意点は、「黄と青で緑を作る」という混色のイメージを頭で考えるのではなく、単に手の動くままに混色することにある。何も考えずに混色するだけで様々な色ができること、身の回りにある色は3原色と白の混色によって成り立っていること、自分の作った色が世界で唯一の色であることを経験し、認識することに重点を置いている。また、一般的に灰を作るには白に黒を混色すると考えがちであるが、キミコ方式では3原色と白で灰を作る。同じ灰でも10人いれば10通りの灰が出来上がり、自身が感じ見えた色をよい色としている。また、自分の色を作るには、多色の絵の具を準備するのではなく、最低の基本色(3原色と白)を組み合わせて作るほうが、描画活動に真剣に取り組むことができるとしている。

4. キミ子方式が重視する描画活動の基本

松本キミ子は、描画活動の描き始めの基本として以下の6点を挙げている。

- ①下描きをしないこと
- ②本物のモデルを置いて触りながら、その順序に従って描くこと
- ③書き始めの1点を決め、隣へ隣へと描き進めること
- ④画用紙の面積が足りずに絵がはみ出す、また、描くことができなくなった場合、継ぎ足せばよいこと
- ⑤画用紙が大きい場合、絵の大きさに合わせて画用紙を切り整えればよいこと
- ⑥描画をどこでやめても立派な作品であること

キミ子方式は、「逆転の発想で誰でも絵が描ける」ことを、描き初めの基本について考えてみたい。

基本の①に挙げられた下描きとは、絵を描くときに、おおよその輪郭を描くことであり、ラフスケッチともいわれる。物の形や位置、色面の分割等において見当となる要素であり、一般的に輪郭線といわれる。しかし、キミ子方式では絵を描くことが苦手な人には苦手なことはやめること、下描きをしないことを説いている。白い画用紙を目の前にして何を書いていいかに迷い手が止まってしまう、いわゆる「白い画用紙の恐怖」を抱く子どもにとっては、救いとなる観点と考えられる。

基本②に挙げられた描画のモデルとして、キミ子方式が扱うのは植物・動物・人工物であり、それを実際に目の前に置いて、触りながら描くことを推奨している。これは、松

本キミ子が代替教員として子どもの描画活動に関わっていた時にウサギを触り、体毛の流れに法則があること、流れに沿って筆を動かすことが体に宿るリズムの表現となること、観察して筆を動かすだけで動物が描けてしまうことに気が付いたことから生まれた。この方法であれば、モデルとの触れ合いが保育の導入と同等の役割を担うと考えられ、モデルの特性や自分が気付いたことを基に、興味関心を募らせた子どもが描画活動に専念すると期待できる。

基本③にある描き始めの1点とは、対象物の成長や製造される際の始まりの個所のことである。例えば、チューリップの場合一般的には花から描き始めるが、植物の成長の初めとなる茎の根元を1点と定め描き始める。その点の色を観察し、感じた色を自分で作り描き始める。根元、茎、葉、花へと植物の成長の順番通りに描き進める過程で、子どもは観察や手で触りながら隣へと描き進める。モデルと真剣に向き合い変化する色や形を感じるままに描き続けるうちに全体像が見えてくる、といった描き方といえる。

基本④に挙げられた内容は、描画面積を自由に決める方法であり、画用紙が足りない場合は足して描画面積を拡大する考え方である。キミ子方式で描画をすると、画用紙から絵がはみ出てしまうことが度々起こる。これはあらかじめ全体像を想定せずに書き進めるからであるが、その対処法として、画用紙を継ぎ足す指導を行う。保育者や保護者は、子どもに大きな絵を描かせたい、という希望を持っていることが多いが、モデルに集中し、観察して見つけた色や形の点がつながり広がっていくことに、子どもはやり切ったという満足感や自信を持つであろう。

基本⑤に挙げられた内容は、基本④とは逆の項目であり、描画が小さい場合の対処法である。大人が大きな絵を求める傾向が強い理由は、大きな絵は、元気があってよい、上手な絵等、と評価されることが多いからである。また、画用紙全域に絵を描く子どもは、絵を描くことが好きで自信があると考えられている。実際に色彩心理学の観点に立った子どもの自由画の解析では、画用紙の真ん中に大きく堂々として描かれている絵やシンメトリーな絵は、保護者からの愛情を十分に受けた、よい子が描くよい絵であることが分かっている。では、画用紙の隅に小さく描かれた絵はよくない絵であろうか。小さな絵を描く子どもの中には、絵を描くことに自信のない子どもや描いた絵を見られたくない子どもがいる。そのような子どもの絵に対する対処法として、子どもの絵が画用紙の中心に来るように、画用紙を切り整えることを推奨している。

基本⑥に挙げられた内容は、キミ子方式の基本①から③を踏襲した考え方からなる。植物は根から成長の過程に従って、動物は毛並みの流れに従って、人工物は物が作られた順に従って画面を構成していく。成長の過程や制作の過程に従っているため、途中で描画をやめても作品に大きな

影響はない。「モヤシの根っこ」等のタイトルをつけることで立派な作品であるとしている。これ以上描画を続けたくないといった子どもの心に寄り添う指導方法と考えられ、それまで集中して子どもが描いた作品を大切に扱う評価方法といえる。

5. キミ子方式の描画のモデルと指導法

キミ子方式で最初に描く植物のモデルとして取り上げられるのは、モヤシである。モヤシには、根や茎、葉という植物の要素が揃っており、細い根や色が変化していく茎、葉が筆遣いや色作りの基本を身につけるのに適している。小さく華やかさに欠けるモデルであるが、集中して観察すると個性的なモデルの魅力に気が付くことであろう。

子どもは、根の先を出発点としてモヤシの成長の順に従い、根から茎へと書き進める。ゆっくりと描かれる線は、酒井式描画法では「カタツムリの線」と呼ばれる線描であり、定規で引いたような直線ではなく、ゆっくりと筆を動かすことで震えゆがむといった、子どもの手の動きに伴う生々しい線が生まれる。まるで日数をかけて育つ植物そのものを再現しているかのような描画方法である。色や形の変化を筆で描き進める行程で細部をよく見ている子どもは葉脈があることに気が付くようであり、葉脈を先に描き、葉脈から外に葉が伸びていくことを指導する。

その他の植物のモデルは、ニンジン等の根菜、ミヤコワスレ等の道端の小さな植物、コスモス等の庭や畑の草花、カボチャ等の野菜、イチゴ等の果物、木の幹や新緑の葉等であり、それぞれに描画の方法や指導のポイントが異なる。例えば、ニンジンは輪切りの円が積み重なり円柱を構成する立体であること等、認識させるとともに目を閉じて触り立体感を感じ取らせる。ニンジンには成長に伴う心地よい肌触りの方向があること、手指の肌が感じ取る肌触りや立体感、成長の過程を感じ取れる言葉がけや指導法によってキミ子方式は成り立っている。人工物としては毛糸の帽子等、動物としては犬等が取り上げられているが、毛糸の帽子は編み始めの毛糸の目から、動物は鼻の頭から毛の流れに沿って、観察や触覚を通してモデルの形や成形、立体感等を理解し描き進めるように指導する。下描きをせずに自分の色で描き進めることによって、誰でも自然に絵が描けるという優れた指導法と考えられる。

また、キミ子方式ではモデルの質感を表現するために、筆の選び方や使い方にも力を入れている。市販されている筆は丸筆、平筆、面相筆の3種類に分けられる。筆の毛の材料においては、天然獣毛、人工毛、ブレンド毛に分けられる。天然獣毛は、主に馬やタヌキ等動物の毛が使用されており、しなやかな描き味を持つこと、表面がギザギザとしているため高い保水性を有することが特徴である。人工毛はナイロン製で、素材自体に経年劣化が起きにくいこと、

ブレンド毛は獣毛と人工毛のよい特性を掛け合わせていることが特徴である。

キミ子方式では、多くの水と絵の具を含んでくれること、ぼかしや滲みの効果を出しやすいこと、紙面に優しく色を出してくれること等の理由から、天然獣毛の筆の使用を推奨している。天然獣毛のよさは、ザリガニやイカの質感を水分量の調整、硬さ、柔らかさを表現できることである。子どもは、モデルの触感から得た、硬さや柔らかさ等の表情を水分量を調整した描画で表すとともに筆の動かし方を、フニャフニャ、ゴツゴツ、ベチョベチョ等、豊かな言葉で表現しながら描くそうである。それは、子どもの感受性やモデルへの言葉の意味づけの豊かさを表しており、筆の速度と水の量、筆の向きの違いでモデルから感じ取った全体像を表現すると考えられる。

6. 子どもの優れた絵画表現活動で知られる園の実践

A園では、キミコ方式を活用した子どもの描画活動を実践している。キミコ方式の指導法を取り入れたきっかけは、絵を描くことが嫌いな子どもを少なくすること、子どもが自由にのびのびと描画すること等、を目指して、子どもの描画活動や身の回りの環境を充実させている園として、全国的にも有名なB園の研修会に参加したことである。

B園では、子どもが本能的に持っている自己表現力や新しいものを作り出そうとする強い欲求を満たしながら、絵画表現活動を通じて子どもの能力を伸ばすことを重視している。絵画表現活動の目的は、上手な絵を描くことではなく、子どもが未来へ向けて伸びる力を育てることであり、子どもの作品に素晴らしい絵はあっても上手、下手で評価することはない。1年間に描く絵の枚数は3歳児が4~5枚、4歳児5~6枚、5歳児10枚以上である。また、1回の描画時間は、3歳児が15~20分、4歳児が25~30分、5歳児が40~50分と、年齢や題材に応じて変えており、経験や自己表現力の蓄積により、年齢が上がるにつれて長い時間集中することができるようになる。結果として、描画活動を苦痛と感じる子どもは存在せず、楽しい環境下で絵画表現活動が展開されている。

B園では絵画表現活動を活発にする要素はそれだけでなく、紙版画や様々な素材を使用した季節ごとの作品作り、セロファン紙を使用した光のアート作品作り、粘土でお皿を作り近隣の陶芸家に焼成してもらい陶器づくり、壁面や天井を利用し、立体的に見えるように工夫された壁面構成等、子どもの五感に刺激を与え、気づき、観察、経験、自己表現が深化する教育プログラムを用意している。子どもの素晴らしい作品は、保育室や廊下、階段等、に展示されるが、1年に1度は額付きの状態ですべて全園児の作品を展示するような工夫もされている。また、12月には、園の教室全体を展示会場化した子どもの作品展を開催している。その場

は1年間の子どもの成長や表現力を目の当たりにするだけでなく、活動の内容や指導内容、方法を確認できる場でもあり、勢いのある子どもの素晴らしい作品群に感動を覚える保護者や教育関係者が多い。作品制作活動だけでなく、作品の鑑賞教育にも力を入れており、子どもたちは光や風で変化する色や作品、展示物にあたる風の音等、に気づく等、時刻や天候、季節の移り変わりも作品を通して感じ取っている。

子どものための環境を整える要素としては、園庭に咲く植物や飼育される小動物の存在も大きい。4月に5000本以上咲くチューリップや園で品種改良したバラ、バラのアーチトンネル、ミカンの木等、四季を通じて色とりどりの植物が生殖し、子どもの生活環境を彩っている。子どもたちと生活を共にし、栽培や飼育、観察等、の活動を通して子どもの五感に影響を与える、葉や花が綺麗な樹木としては「ハンテンボク」「マンサク」「ムクゲ」等13種類以上が、実を食べることができる樹木としては「ブドウ」「ザクロ」「キウイ」等12種類以上が、四季折々の草花としては「ペチュニア」「サルビア」等10種類以上が栽培されている。小動物としては、羽根の美しい「クジャク」や模様の珍しい「ホロホロチョウ」、珍しい色の羽根を持つ「シロクジャク」等13種類以上が、小動物としては「テンジクネズミ」「バングウサギ」「コヤギ」が飼育されている。

このような取り組みによって、B園は子どもの環境や描画活動に関する数々の賞を受賞する園としても有名である。そのようなB園の研究会に参加したA園の園長は、子どものための環境や子どもの自主性に基づく絵画表現活動の素晴らしさに感動し、その内容を自分の園でも実践できないかと考えたそうである。ただし、B園の活動そのままを導入するのではなく、何ができて何ができないのか、A園の子ども達の表現活動に適したアレンジはどのような方法があるのか等、を重視して計画を練ることにした。

7. キミ子方式を活かしたA園の造形表現活動

子どもの造形表現活動の計画を立てるにあたり、A園では、キミ子方式を活かした絵画表現活動を実践するのは4歳児クラスで1回、5歳児クラスで3回と決め、その他の造形表現活動に関しては、3歳児から5歳児を通して子どもの発達段階に応じた遊びや表現活動を展開すること、色や形、材料と触れ合う遊びや活動を重視すること、子どもが出会った色や形、質感、匂い等、に気づくように配慮をした言葉かけや指導を行うこと等、を心がけている。また、子どもが目にする物の物理的な構造に関心を持つことができるように指導計画の改善を図った。例えば、アサガオの花で色水遊びする際には、花を摘み、色水を採み出すだけでなく、360°の方向から観察し様々な形があることを知る、花を分解して雄蕊と雌蕊があることやそれらの数、その役

割を知る等、子どもの新たな発見につながるように言葉がけに工夫をしている。保育者との会話を通して、子どもたちは見慣れたアサガオの花の仕組みに興味を持ち、つるや葉の形の観察や質問をするようになるという。

色や形、植物の成長に気が付くような環境としては、園庭に花壇やプランターを用いた、子どもたちの植物園を作り、四季を通じて複数の色の花が咲くように植物の栽培カレンダーを作成した。植物の栽培活動を実践するには、初期費用以外に肥料代金や水道料金等、維持費等、かなりの出費が必要となる。前述したB園では、8月の水道料金だけで数十万円かかるとのことであり、四季を通じて数種類の色の一年草を栽培することは適切ではない。そこで、種の取れる多年草や球根の残る宿寝草を栽培するよう工夫している。また、種や球根を表現活動や遊びの材料として活かす工夫もしている。

造形表現活動の例としては、年齢ごとに表現可能な方法で描く、園庭の花の絵や運動会の絵、遠足の絵、動物の絵等、の造形表現活動の他に、色画用紙を使用し立体的な作品に仕上げ壁面構成とする、季節の花や魚の水族館、ビニールの透明感を活かしたスタンドグラス、各行事に関する作品、廃材を利用した工作、風船の張り子を活かしたお母さんの立体作品等の造形表現活動を展開している。キミ子方式を用いた表現活動は、4歳児の「鳥の描画活動」、5歳児の「お父さんの描画活動」「船の描画活動」「お神輿の描画活動」で実践される。ここでは、鳥の絵とお神輿の絵の活動の内容を取り上げる。

鳥の絵の造形表現活動は、A園の子どもたちがキミ子方式に出合う初めての場である。まず、モデルの観察を行い、モデルの色や形の違いや変化、毛の流れ、モデルの各部位がどのような役割を持つのか等、保育士が子どもとの会話を通して伝え、子どもの発見や興味関心を引き出す。その後、保育士が描き方の見本を見せながら説明し、それを真似て、子どもがオイルクレヨンを用いて鳥の絵を描き始めるという流れで活動が進む。キミ子方式にある、観察によって形を見出し、隣へと描き進める方法を取りながら表出された形は全体に広がっていく。次に、鳥の画像や図鑑を見ながら観察した鳥の要旨を思い出し、固形絵の具を使用して彩色を繰り返し完成に至る。

お神輿の絵の造形表現活動は、秋祭りで使用されるお神輿の見学から始まる。子どもは、巨大なお神輿の大きさに感動するとともに、装飾の色や形等に気づき、発見した内容を子ども同士、先生との会話を通して共有する。その後、園で色画用紙やすずらんテープ、オイルクレヨン等の素材を用いてお神輿づくりを行い、完成したお神輿を担いで園内を巡る、お祭りごっこを楽しむ。お神輿づくりでは、「ここに〇〇があったよ」「あそこの色は△△だった」というように、子どもの気づき、記憶が次々と表出されるという。このようにして、子どもたちはお神輿への興味を募らせて

いく。実際に本祭りに参加し秋祭りの熱気を感じた後、お神輿の絵の活動に入る。それまでに、鳥の絵、お父さんの絵、船の絵の経験から、子どもたちは自身で描画の出発点を決め、自分の記憶やお神輿や秋祭りの画像をもとに下描き、彩色、完成への行程を進める。

指導では、時間内に終わらせるのではなく個々の子どものペースで活動を展開すること、日を変えて何度も挑戦する環境を整え気に入った作品を完成させること、描くことが難しいと感じる部分を具体的に聞きだし援助すること、時には保育者も一緒に絵を描き興味関心、情報等を共有すること等に配慮している。一度に描き終えることを強いることなく、続きは、写真や図鑑を見ながら保育者と会話を重ねながら描き進める。子どものやる気を重視し無理に書かせることはせずに、子どもの努力を認め褒めることを重視し指導する。成果としては、絵を描くことが嫌いな子どもが、鳥の絵を完成させたことをきっかけに自信を持ち、描画活動を好きになる姿が見られること、続けて複数枚の絵を描く姿が見られること、子どもがキミ子方式の手法を徐々に理解し自ら描画する姿が見られること等である。

8. 考察

A園でのキミ子方式を用いた描画活動は、キミ子方式の「描き始めの基本」と異なる点がある。それは、下描きをすることである。下描きをせずに絵の具を混色し、画用紙に直に描画することから始まり、隣の色や形を観察し隣へと描き進めることがキミ子方式の基本である。下描き等、苦手なことをやめること、下描きをしないことを説いている。では、下描きを描くことは避ける行程であろうか。A園で造形表現活動を行う子どもの年齢が、5歳児であることを忘れてはならない。子ども描画の発達段階において、5歳半ばの子どもの絵に現れる変化は、輪郭線で描くこと、場面を描くことの2点である。

5歳児までの絵は独立した形を付け足す描き方であるが、5歳児以降の絵は複数の形を連続した輪郭で一つにまとめた描き方となる。複数の部分を一つの輪郭にまとめて表現することは、絵の全体像を計画的に表現できるようになったことを意味する。下描きを描く行為は、子どもの絵の発達に関わる大きな流れであり、その後は輪郭線で描く描画方法が主体となっていく。また、5歳児になると、誰々が何々しているところ、という場面を描く試みが現れる個人差や男女差が見られる時期でもある。5歳児の子どもが輪郭を描くことは、子どもに無理なく造形表現活動を楽しませること、子どもの描画の発達段階に適した方法であること等、子どもの優れた造形表現活動を展開するために、A園の子どもの特性とキミ子方式の指導法を上手く融合させた、優れた取り組みと考えられる。

また、固形絵の具を使用することも子どもの発達段階を

重視した方法である。絵具をチューブから必要量絞り出し筆で混色することは、5歳児にとっては困難な作業である。固形絵の具は筆の水で絵の具を溶かして色を取り出す画材であり、筆で絵の具の表面をこする回数によって色が濃くなる、という仕組みである。一度に多くの絵の具が溶けることもなく、子どもでも簡単に色のトーンを生み出すことが可能となる。また、固形絵の具が固定された容器自体がパレットの役割を担い、片付け等が簡単なことから、幼児に適した画材といえる。

指導においては、子どもの活動のペースを重視した体制を整え、子どもの意思に任せて完成までの活動回数や時間を調整できること、子どもの困難に寄り添い会話を通して悩みや不安を引き出しその対策方法を援助すること、子どもの気づきや気持ちを共有し、一緒になって作品を完成させること等、言葉がけや細かい配慮が計画的に配置されていた。子どもの意思を尊重して作品を仕上げる方法は、長時間の活動で疲れや嫌気がでない活動の体制を整えることにつながっている。また、子どもの感動や発見、挑戦しやり遂げたという満足感や達成感を与えるとともに、子どもが気に入り納得した作品作りが可能となる。A園の指導内容は、子どもの心に寄り添うキミ子方式のよさを活かした指導方法であり、それまで集中して子どもが描いた作品を大切に扱う指導方法と考えられる。

9. まとめ

本稿では、キミ子方式の出版物、キミ子方式に関する文献、キミ子方式を用いた活動を実践するA園、B園の活動記録から、キミ子方式を用いた子どもの表現活動の内容と指導法を調査し、キミ子方式の実践内容や指導法が子どもの造形表現活動や子ども絵に与える影響について考察した。

キミ子方式等の描画法を子どもの表現活動に生かすことは、画一的な作品や個性のない作品を生む、また、写実中心主義となる可能性があるものの、子どもの実態に沿うように工夫した活かし方や言葉がけ等の指導法によって、松本昭彦が言うように作品に自由を与えることも可能であることが分かった。また、子どもの感動や発見、満足感等を与える活動となることも分かった。

今後は、A園の指導内容や方法をさらに詳細に分析し、子どもの実態に即した指導の内容や方法の在り方について考察することを継続したい。

謝辞

本稿のために子どもの造形表現の活動記録をご提供下さった、A園、B園の保育者の皆様に感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

注

- 1) 降旗孝：学校現場における図画工作教育の課題—教員免許更新講習の実施・考察から—, 美術教育学第32号, pp.393-404, 2011
- 2) 上掲1)
- 3) 島田由紀子：幼児、児童のメソッドによる描画指導法の研究, 和洋女子大学紀要第57集 87-96, 2017.
- 4) 松本昭彦：キミ子方式と大学生, 愛知教育大学実践総合センター紀要第8号, pp.189-196, 2005

文献

- 1) 降旗孝：学校現場における図画工作教育の課題—教員免許更新講習の実施・考察から—, 美術教育学第32号, pp.393-404, 2011
- 2) 島田由紀子：幼児、児童のメソッドによる描画指導法の研究, 和洋女子大学紀要第57集 87-96, 2017.
- 3) 島田由紀子：保育系学生の実習における造形活動, 和洋女子大学紀要55, pp.109-117, 2015
- 4) 松本昭彦：キミ子方式と大学生, 愛知教育大学実践総合センター紀要第8号, pp.189-196, 2005
- 5) 松本昭彦・金由惻：キミ子方式の応用題材に関する研究—応用題材開発の可能性について—, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要vol.2, pp.29-36, 2012
- 6) 松本昭彦：キミ子方式と創造画, 愛知教育大学教育実践センター紀要, 第13号, pp.139-146, 2010
- 7) 林有紀：視野を広げる造形活動—教育現場における造形指導の工夫についての実践報告—, 京都文教短期大学研究紀要52, pp.209-215, 2014
- 8) 松下明生：幼児の造形活動と小学校図画工作科の内容分析：文部科学省検定済教科書に見る幼児課題との同一性と教育内容の変遷, 名古屋柳城短期大学研究紀要37, pp.75-86, 2015
- 9) 富山祥瑞：教科としての「図画工作・美術」が抱える課題—教育学部・大学生の回想による調査報告—, 愛知教育大学研究報告, 教育科学編62, pp.207-214, 2013
- 10) 高橋敏之：図画工作・美術科教育における展覧会及びコンクールの意味と絵画指導の問題点, 美術教育学(24), pp.197-209, 2003
- 11) たのしい授業編集委員会：だれでも描けるキミ子方式・たのしみ方・教え方入門, 仮説社, 1944
- 12) 松本キミ子：キミ子方式宇宙のものみんな描いちゃおう—植物・動物・人工物の描き方, 太郎次郎社エディタス, 1987
- 13) 松本キミ子：三原色で描く四季の草花—松本キミ子のフィールドノート誰でも本物ソックリの絵が描ける画期的絵画入門の本, 日貿出版社, 2010

描画法を活かした子どもの造形表現活動の内容

- 14) キミ子方式公式HP/キミ子プラン・ドゥ：<http://www.kimiko-method.com/>, 2022.6.10.オンラインアクセス
- 15) 酒井臣吾：酒井式描画指導法 新シナリオ・新技術・新指導法—進化し続ける酒井ワールド—, 学芸みらい社, 2015
- 16) 酒井臣吾：魔法の酒井式描画法, 明治図書, 2005

